



留学生活に見た共生のカタチ

神戸大学 経済学部3年

やまだ まな
山田 愛さん

はじめに

2006年夏、私はカナダへと留学に旅立った。多文化主義を標榜するカナダ社会は、グローバル化する世界の縮図といっても過言ではなく、そこでの生活は、毎日が異文化との格闘であり、また、異文化との融合でもある。文化背景の違う友人と衝突することもしばしばで、「私という日本人が、彼らとどう共に生きていくか」と考える作業は日々の課題だ。このようなカナダでの経験は、日本が世界とどう共生していくべきかという問いに示唆を与えてくれた。私はこの論文を、留学生活で率直に感じた視点をもとに執筆していきたいと思う。

1. 発展的共生のカタチ

共生とは、何か。文字通り解釈すれば、違ったもの同士が仲良く協力し合って生きること、という日本的な「和」を思い浮かべたくなるが、私はそれを、異種間の絶え間ない「衝突と融合」による、「止揚」の形成であると定義付ける。「止揚」とは、ヘーゲルによって用いられた哲学用語で、違った考えをぶつけ合い議論することで、これまでにない新しい考え方を統合し発展させるなどの意味で使われる。¹⁾ 文化Aと文化Bが衝突・融合し、新しい文化Cが創出される。このような「止揚」形成に向かう姿勢こそが、異種間の理想的な共生の形であると私は考える。

私はこれを、カナダにおける留学生活の中で学び取った。私という日本文化が、私とは全く異なった文化Xに突き当たった時、摩擦に悩みつつも、互いの価値観をぶつけ合い学び合うという融合過程を経て、全く新しい価値Cを生み出す。この経験を繰り返すうち、本当の意

味での共生とは、違ったもの同士がうまく組み合わせたり、より良いものを作り上げることだ、ということを発見したのである。

さらに、多文化にもまれての留学生活が教えてくれたことがある。それは、「衝突・融合・止揚」の発展共生を可能にするのは、「外向き」と「内向き」という二方向の姿勢だということだ。「外向き」姿勢とは、相手と共に考え、働き、新しいものを生み出していきたいという真摯かつ冷静な態度であり、「内向き」姿勢とは、自分はAやBであるという明確なアイデンティティを確立し、それを伝える伝達術を磨くという鍛錬の態度である。カナダの大学の教室では、カナダ人だけでなく、中国・メキシコ・インド・ケニア等々の学生と机を並べて学ぶことは日常だ。クラス議論の際、より高い止揚を形成するためには、独自の考えと相手の考えとをどう融合・発展させていくかという「外向き」姿勢、独自の考えやアイデンティティをいかに構成し、それをどう伝えるかという「内向き」姿勢が求められる。

私が留学生活で見出した共生のカタチ、そのために必要な二方向の姿勢は、全く一個人のものに過ぎない。しかしこれは、共生とはナニで、日本が今日の世界においてどう各国と共生・発展していくべきかという大きな問いに答えるものではないかと思う。

2. 変革する世界

日本が世界の国々どう結び付き、共生していくかを議論する前に、現代世界でどのようなことが起こっているのか考えてみたい。

今日、世界は変革期にあるといえる。ボーダーレス化が進み、各国間の相互的結び付きはこれまでにない規模・スピードで進展している。この流れの中で重要だと思われるポイントを以下の三点にまとめてみた。

第一に、歴史的なタテ秩序の崩壊とヨコ秩序の出現である。資本主義と社会主義というタテ二軸で成り立っていた冷戦構造が崩壊し、中国・インド・ロシア・東欧など、新たな参入者たちを加えたヨコ秩序が現れた。このヨコ秩序においては、中国・インドなどの新巨人らが特色を活かして先進地域との経済的融合を促進して成長を続け、世界の多極化という、秩序変革期を迎えている。オハイオ州立大学教授Oded Shenkar氏は、著書「The Chinese Century」の中で、「購買力平価ベースのGDPで見れば、アメリカが中国に追い抜かれる日が来るのもそう遠くない」と述べている。²⁾ 日本は既に中国・インドに抜かれ4位にある。³⁾ このような秩序変化は、まず最も重要なことである。

第二に重要な点は、コミュニケーション手段の革命である。個人は、スカイプやメッセージの登場によって、今やネットにつながさえすれば、海外の友人と、映像付きで文字・音声会話を無料で楽しむことができる。この革命は地理的障壁をぐんと低くし、海や国境を越えずとも相手とつながり、共に同じフィールドで働くことさえ可能にしている。

第三に重要なのは、知識の流動化である。0と1のデジタル化技術とインターネットという普及手段によって、個人は莫大な知的資源にアクセスすることが可能となった。「形式知」と呼ばれる文章化・図表化・数式化によって表現できる原材料的な知識は、世界中に分散する傾向にある。これにより、先進的地域のみならず、世界各地から新たなイノベーションの可能性が出てきた。さらには、世界中の知的資源の共演という、複雑な形での知的共同開発が注目されてきている。

このように世界的変革期においては、各国間の「衝突と融合」はますます加速していく。そしてその中で、互いにかに学び合い高め合い、「止揚」を形成するかということが重要になっているのではないだろうか。

3. 世界的ダイナミズムへの「外向き」姿勢

このような世界的ダイナミズムと共生するために日本に求められる姿勢とは何か。それは冒頭で述べたような、「外」・「内」の二つの姿勢である。

まず「外向き」姿勢の精神として、世界的ダイナミズムを肯定的に受け止めることが必要だ。世界秩序の変化を単に中国脅威論や産業空洞化として悲観的になっては何も始まらない。世界の構図が変化する中では秩序変化が起こることは当然だと受け止め、ただだからといって日本が営々と築いてきた実力が一挙に衰えたわけではないという認識を持つべきである。ピンチはチャンス。外的変化をいかにチャンスとして捉えていくかが大切なのである。

このような外向きレンズで世界を見れば、様々な変化を好機として捉えることが出来る。まずチャンスとして認識することが必要なのは、世界的分業の潮流だ。Fortune誌2007年7月号で世界最大企業として第1位にランクインしたアメリカの流通企業Wal-Martは、労働資源という中国の得意分野を活かした分業量販ビジネスである。⁴⁾ 今後日本は、比較優位を取れない産業、もしくは産業内のある部分については、海外に生産拠点を移す等の国際分業体制を築いていかねばならない。私は留学中、様々な国籍背景を持つメンバーとグループ作業を行うことがあったが、最も高い成果を出したグループは、各個人が得意分野に特化し、その機能を最大限発揮した所であった。このように、融合が進む世界

においては、相手がどの分野で秀でているかを観察し、自分の持つ得意分野と組み合わせて両者の可能性を最大限引き出していくチームワークの視点が重要になっている。

もう一つチャンスとして目を付けるべき点は、世界規模での知的共同開発の可能性である。知識の流動化が進む中、世界各地の知的資源にアクセスすることは容易となった。新興各国の知的可能性にも注目が集まり、様々な形で知的化学反応が可能となっている。今後日本は独自に知的資源の開発に努めるだけでなく、世界中の知的資源とのヨコのつながりによるイノベーションの可能性を認識する必要がある。

4. 「外向き」のための「内向き」政策

一見逆説的ではあるが、これら「外向き」戦略を取るにあたって日本に必要とされるのは「内向き」政策である。外部世界との衝突と融合によりさらに高みへと向かうた

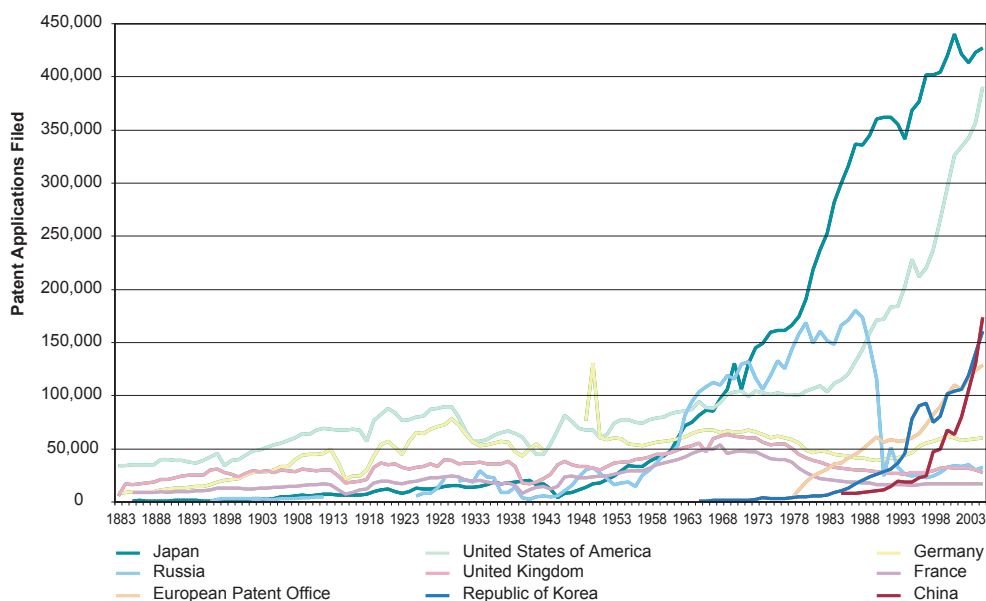
めには、自身の強力な内的発展が欠かせない。「内向き」政策とは、他者に飲み込まれない特色ある得意分野の形成と、それを発信する技術を磨くことである。では日本は世界に対して何を武器に、どう発信していくべきなのか。

日本の誇り：ジャパン・イメージ＝テクノロジー

カナダで留学生に日本のイメージはと問うと、まず一番に挙げてくれたのは、日本の伝統文化や食文化の固有名詞ではなく、多くが“technology” “sophisticated”といった単語であった。北米で大ヒット中のロボット映画「Transformers」の中で、地球上に存在し得ないハイテックロボットが登場すると、「これは日本製に違いない」と主人公の口をついて出るシーンがある。日本に行った経験のない私の友人などは、日本に行けば飛行場で高性能ロボットが「コンニチハ」と温かい挨拶をくれると本気で思っていた。それほど、ジャパンというのは高度で洗練されていることで有名なのである。

以下に示したのは世界知的所有権機関による、年代別特許登録数の統計である。1960年以來日本の特許

Evolution of Worldwide Patent Filings⁵⁾



WIPO Patent Report: Statistics on Worldwide Patent Activity (2007 Edition)
http://www.wipo.int/ipstats/en/statistics/patents/pdf/patent_report_2007.pdf

登録数は鰻上りで、アメリカと並び他国をはるかに凌いでいる。

また特許数の分野別内訳を見ても、日本は情報技術・映像音声・電子装置・農業食品など、多岐にわたる分野で首位を獲得しており、日本は文字通りテクノロジー一大国だといえる。⁵⁾

日本は全く新しいものを生み出す発明力が弱いといわれる。しかし、人は、不得意分野よりも得意分野を伸ばすほうが、簡単に高い成果を出すことができる。発明力の向上は勿論重要だが、世界の中で得意分野を持つことを迫られている中、日本は今持つテクノロジー力の向上を最も重視すべきである。

日本のテクノロジーは、原石をゼロから“作る”テクノロジーではなく、原石を“磨き”、“高める”ということに特化したものである。このような「原石を磨く」姿勢は、日本の精神に古くから根付いており、私たちが普段何気なく使っている日本語の文字表記法に克明に見出すことができる。

最も複雑な言語の一つとされる日本語の表記体系は、5～6世紀に中国から取り入れられた漢文をもとに発展してきた。漢文という原石に、日本語として読めるよう返り点等の書き下し法を加え、より便利に表記できる文字として仮名を発明した。さらに西洋文明に影響を受けると、ローマ字表記法を生み出し表記法に加えた。このように、日本語は他言語という原石をもとに、漢字・ひらがな・カタカナ・ローマ字という4種類の文字からなる、見た目にはより洗練された独自の表記体系を完成させたのである。

取り入れた原石を大切に磨き完成度を高めるという「ジャパン＝テクノロジー」の方程式。これを保持・発展させていくことが「内向き」政策にまず必要不可欠であ

ると考える。

発信力

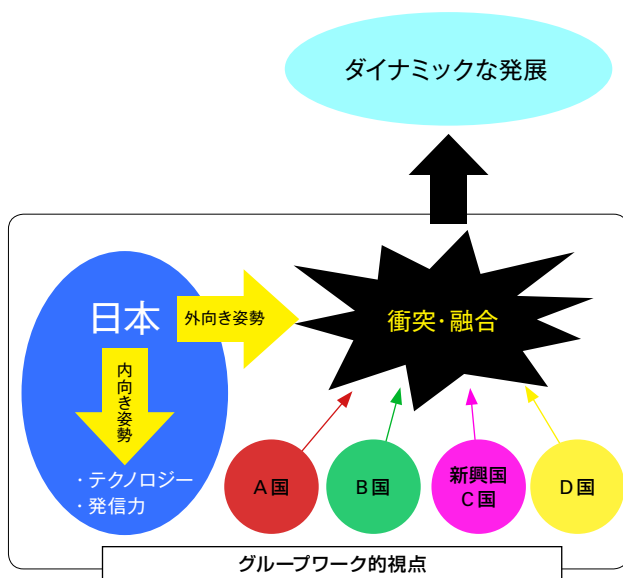
「内向き」政策におけるもう一つの重要な点は、発信力を高めることだ。ところで、日本の発信力とはいかほどのものか。外交の場面など、よく日本は発信力に欠けるといわれるが、本当にそうか。カナダ生活の中で周りを見回してみると、文具店にはZEBRAのペン、外を走る車のエンブレムはトヨタ、家のリビングには東芝のDVDプレーヤー、と日本社製品を見ない日はない。このような現象は、発信力なしには起こりえなかったはずだ。では日本が持つ発信力とは何か。それは、真面目な礼儀正しい態度で、地道に、粘り強く浸透させていくという、大地に染み入る雨水のような発信スタイルではないだろうか。強く主張し相手に打ち勝つ姿勢だけが世界に通用する発信力ではない。日本は日本らしくあることで、既に十分国際的に通用する発信力を備えているのではないだろうか。

このように見ると、日本に必要なのは欧米的な発信姿勢ではなく、日本的な発信能力をもって世界に臨む「自信」と、それを助ける制度的枠組みや語学能力の向上といった、「サブスキルの構築」であると考えられる。同じフィールドで共同作業を行うには、国際標準という基本的ルールの導入と、意思疎通のための語学力が欠かせない。しかしもっと重要なのは、日本人はシャイだ内気だと卑屈になるのではなく、地道で粘り強い発信を続けていく姿勢に自負を持って世界に挑戦することなのではないだろうか。

結論

相互関係が深まる世界での理想的な共生スタイルとは、異なるものとの衝突を大切に、互いに学び合い、得意能力を混ぜ合って高め合う、グループワークのよう

なものである。そのグループワークでアクティブに活躍するために、日本は、「外」・「内」の姿勢をバランスよく持つことが必要だ。この二つの態度を持って、他国とダイナミックな発展を目指していくところ、今後の日本に求められている共生のカタチではないだろうか。



文中注

- 1) 「大辞林」第二版 三省堂より
- 2) Shenkar, Oded, The Chinese Century, Upper Saddle River, NJ: Wharton School Publishing, 2005. 161-163
- 3) World Development Indicators database, World Bank, 1 July 2007 http://siteresources.worldbank.org/DATASTATISTICS/Resources/GDP_PPP.pdf
- 4) Demos, Telis. "The World's Largest Corporations." Fortune, July 23 2007: 131-146
- 5) WIPO Patent Report: Statistics on Worldwide Patent Activity (2007 Edition) http://www.wipo.int/ipstats/en/statistics/patents/pdf/patent_report_2007.pdf

参考文献

- ・ 「途上国ニッポンの歩み」 大野健一、有斐閣 2005年
- ・ Boylan, Michael. Basic Ethics, Upper Saddle River, NJ: Wharton School Publishing. 2000
- ・ Demos, Telis. "The World's Largest Corporations." Fortune, July 23 2007: 131-146
- ・ Friedman, Thomas L. The World is Flat, Union Square West, New York: Farrar, Straus and Giroux. 2006
- ・ Rondinelli, Dennis A. and Heffron, John M, ed. Globalization & Change in Asia, Boulder, Colorado: Lynne Rienner Publishers, Inc. 2007
- ・ Shenkar, Oded. The Chinese Century, Upper Saddle River, NJ: Wharton School Publishing. 2005

インターネットリソース

- ・ 「メタナショナル経営論から見た日本企業の課題」 浅川和宏、2006年4月
- ・ 「中国の台頭と日本企業のとるべき経営戦略」 石井昌司、2006年1月
- ・ 「製品アーキテクチャ論と国際貿易論の実証分析」 大鹿隆、藤本隆宏、2006年3月
- ・ World Intellectual Property Organization, WIPO Patent Report: Statistics on Worldwide Patent Activity (2007 Edition)
- ・ World Development Indicators database, World Bank, 1 July 2007